

令和元年6月14日現在

機関番号：13401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02863

研究課題名(和文) オーラル・ヒストリーによる戦後日本の戦傷病者と家族に関する研究

研究課題名(英文) Oral History of Japanese Disabled War Veterans and Their Families in the Post-World War II Period

研究代表者

藤原 哲也 (Fujiwara, Tetsuya)

福井大学・学術研究院医学系部門・教授

研究者番号：30362338

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では福井県の戦傷病者と家族(妻)に聞き取り調査を実施した。この調査から次の3点が明らかにされた。1) 戦傷病者は家族に戦争体験を語る機会が少なかったが、戦争体験者には自ら体験を語る傾向が強かった。2) 傷痍軍人会会員は傷痍軍人としての強い意識を持っていたが、障害者としての意識が希薄であったこと。3) 戦傷病者の家族(妻)は、夫の受傷時期によって彼らの障害について理解も異なり、傷痍軍人会妻の会への参加程度の違いがあった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

文献史料が多く残されていない戦傷病者の実態を口実記録(オーラル・ヒストリー)で解き明かそうとした点に本研究の意義があると考えられる。また、戦傷病者の大多数が物故者となる中で、家族(妻)に焦点を当て、新たな語りから研究対象にアプローチを試みたことは同様の歴史事象の研究の先例となりうる。先の大戦から70年余が経ち、戦争の記憶の風化が懸念される中で本研究課題が戦傷病者とは何か、戦争とは何かを人々に問いかけた社会的意義は大きい。

研究成果の概要(英文)：In this research, I have conducted oral interviews with disabled war veterans and their families (wives) in Fukui Prefecture. The interviews clarify the subsequent three points. 1) The disabled veterans hardly had chance to talk about their own war and injury experiences to their families, but they tended to share their experiences with those experienced war. 2) Although the members of the Fukui Prefectural Disabled Veterans Association had a strong sense as disabled soldiers, they were less conscious as persons with disabilities. 3) The wives of disabled war veterans differed in their understandings of their husbands' disabilities depending on the time of the husband's injury. Accordingly, there were differences in the degree of participation in the Fukui Prefectural Disabled Veterans' Wives Association

研究分野：障害者史

キーワード：オーラル・ヒストリー 戦傷病者 障害 戦争 現代日本史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) アジア・太平洋戦争期の戦傷病者と家族の戦後日本史を明らかにしようとする本研究は、これまでの研究代表者の研究に基づいて企画された。(挑戦的萌芽研究「第二次世界大戦期における日米傷痍軍人の比較社会史」平成19年～21年度、研究代表者：藤原哲也；基盤研究B(一般)「障害者の労働に関する比較史的検討」平成23年～26年度、研究代表者：藤原哲也)研究代表者の今までの研究では、戦傷病者は軍役に起因する傷病のために国家補償の権利を有し、優先的保護を受けてきた経緯から、国家との関係性の中で規定された特異な障害者であることが検証され、更にこのテーマに関する研究の継続が望まれた。

(2) 研究代表者が戦傷病者の歴史研究に着手した契機は、「障害」が国家の本質を浮かび上がらせ、国家という概念を相対化する上で有力な研究対象になりうると考えたからである。こうした理解に基づく研究に関しては、戦傷病者の表象に着目した歴史研究や戦傷病者対策についての歴史研究のように海外で盛んである。一方、日本では帰還兵の戦後史研究において戦傷病者に関する言及は認められるが、管見の限りでは、戦傷病者そのものに焦点が当てられた研究は散見される程度で、国家と障害の関係を把握するに至っていないのが現状だといえよう。このため、一国史にとどまらず歴史の多様性や特異性を念頭に入れながら、研究代表者は比較史的視角からこの研究課題に取り組んできた。

(3) これまでの研究を通じて、研究代表者は国家と障害の関係を包括的に理解するために戦傷病者と家族についての分析の必要性を痛感してきた。なぜならば、戦後期に多くの戦傷病者が結婚生活を送り、配偶者を含めた家族への国家補償が彼らの世帯に付与された事実が確認されているにもかかわらず、戦傷病者と家族の実態に関する研究は不在に等しかったからである。本研究と関連が強いジェンダー視点から戦後日本史の再構成を試みる研究が近年相次いで刊行されていた。こうした現代に通底する課題を浮き彫りにする研究群は、国家と個人の関係および家族関係の変遷の深い理解にとって貴重な貢献をなし、戦傷病者の配偶者からのアプローチを取る本研究にも重要な示唆を与えていると考えられる。

(4) 本研究は、オーラル・ヒストリー(口述記録)を用いて、戦傷病者と家族の実相への接近を図る。オーラル・ヒストリーは、文献史料では窺い知れない歴史的事実の発掘を通して、歴史の人間の・主体的側面を提示することにその有効性を発揮し、民衆史や女性史等のマイノリティ史研究のみならず、社会学や人類学等の隣接領域にまで及び幅広い学術的成果を収めてきた。これまでの調査活動から、研究代表者は、戦傷病者と家族に関する文献史料の不足のために研究遂行上の困難を経験している。このため、この手法の導入が本研究課題に関する文献史料の不足を補完し、戦傷病者と家族の実態解明に寄与することが大いに見込まれる。以上の点を踏まえ、戦傷病者の配偶者のオーラル・ヒストリーの分析から、国家と障害の関係および戦後日本史に関する新たな知見が期待できるため、本研究を立案するに至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、オーラル・ヒストリー(口述記録)を用いて、アジア・太平洋戦争期の戦傷病者と家族の戦後日本史を考察することである。戦傷病者は、軍役に起因する傷病のために国家との関係性の中で規定された特異な障害者であることが研究代表者のこれまでの研究成果から検証された。この延長線上にある本研究は、戦傷病者の配偶者のジェンダー視点から戦後日本社会における戦傷病者と家族の実態解明を通して、現代に通底する課題を浮き彫りにするとともに、国家と個人の関係および家族関係の変遷に関する深い理解を提示することを意図するものである。戦傷病者の配偶者のオーラル・ヒストリーの分析という今までにない切り口から本研究課題への接近を図り、国家と障害の関係および戦後日本史に関する新たな知見を示すことを目指した。

3. 研究の方法

本研究では、研究代表者の三重県における戦傷病者と配偶者へのオーラル・インタビューの経験を活かし、基礎史料(日本傷痍軍人会や県・地方傷痍軍人会等の出版物、個人所蔵の史料)の分析の上、元福井県傷痍軍人会妻の会会員へのオーラル・インタビューから戦後期における戦傷病者と家族の実態解明に迫った。戦傷病者の世帯は、一般に戦傷病者と健常者である配偶者から構成される点に特徴づけられる。よって、聞き取り調査では「戦後日本社会において(健常者の)女性たちが戦傷病者と生活を共にしたことは何を意味するのか。」という本質的な問題意識に立脚する以下の五項目(1) 傷病(障害)(2) 国家補償(3) 婚姻実態(4) 生活実態(5) 就業実態に着目しながら調査活動に従事した。

調査では、被調査者(配偶者)に対して以下の点を重点的に聴取した。

- (1) 傷病(障害)：戦傷病者の傷病(障害)の種類や程度は、どのように変化したのか。
配偶者は、戦傷病者にどのような介護的役割を果たしたのか。
- (2) 国家補償：戦傷病者と家族は、どのような国家補償・支援を受けてきたのか。
- (3) 婚姻実態：戦傷病者と配偶者は、どのように婚姻関係に至ったのか。
- (4) 生活実態：戦傷病者と家族は、どのような家庭生活を過ごしたのか。
- (5) 就業実態：戦傷病者と配偶者は、どのような職業・職種に従事したのか。

本研究では、研究期間(4年)内に口述記録の分析を踏まえて、戦後期の戦傷病者の実態を浮き彫りにすると同時に、戦後日本社会における戦傷病者と家族の位置づけを考察した。

平成27年度は、本研究の基盤形成期と位置づけ、申請者は史料収集を行いながら、戦傷病者の配偶者にオーラル・インタビューを実施した。また、アーカイブス化に向けてインタビューを書き起こす作業と並行して、収集されたインタビューを分析する。研究会において研究概要・計画を説明した。

平成28年度も、前年に引き続き基盤形成期として史料収集とオーラル・インタビューを継続させる一方、収集された口述記録を分析した。また、研究会において途中経過を報告した。

平成29年度は、オーラル・インタビューを続けながら、収集されたインタビューをもとに論文執筆を開始し、国外(合衆国)にて口頭発表を行った。

平成30年度は、本研究の集大成期とし、論文執筆と国内外の学会にて口頭発表を行った。

4. 研究成果

戦傷病者と家族に焦点を当てた歴史研究：本研究の特色は、長く付随的な事象として扱われてきた戦傷病者と家族を研究課題の中心に据え、その実態を戦後日本史および障害者史の文脈に即して統合的に理解することができた。

オーラル・ヒストリーによる戦傷病者と家族の実態解明：本研究の特徴は、現在極めて少ない状況にある戦傷病者と家族に関する第一次史料の発掘と並行しながら、戦傷病者の配偶者へのオーラル・インタビューから戦後期における戦傷病者と家族の実態を明示する点にある。配偶者のジェンダー視点という新たな切り口から研究対象への接近を試みる本研究は、戦傷病者の多くが物故者となっている制約を克服し、女性たちの語りを歴史の文脈に位置づける多面的かつ創造的な研究成果の可能性を見出した。

新たな歴史像の提示：本研究は、次の二点から新たな歴史像の提示を試みた。第一点は、帰還兵に関する先行研究に戦傷病者に関する研究成果の包摂による多様な戦後日本史の開示である。第二点は、本研究と一般障害者の歴史の接合による日本障害者史の全体的把握である。

今日的課題と歴史の接点：先の大戦から70余年が経ち、戦争の記憶の風化が懸念される中で、本研究課題が人々に問いかける社会的意義は大きかった。2013年に日本傷痍軍人会・妻の会は解散し、当事者の多くが物故者となり、存命の元会員への聞き取り調査の機会が減少することが必至の状況の中で本研究課題に取り組んだ。この機会を見過ごすことは文字どおり「歴史資産」を失うことを意味する。換言すれば、記録が残されてこなかった女性たちの「声」を保存・継承していくことは、私たちの喫緊の課題であると言える。本研究成果が今日的課題と歴史との隙間を埋める一助となり、彼女らへの聞き取り調査が世代間の橋渡しの役割を果たし、平和の礎として貢献できたと言えよう。

具体的には、平成27年から平成30年にかけて、福井県の戦傷病者と家族(妻)に合計30回の聞き取り調査を実施した。この調査から次の3点が明らかにされた。

(1) 戦傷病者は戦争経験のない家族に戦争体験を語る機会が少なかったが、戦争体験者や戦争に理解を示す者には自ら体験を語る傾向が強かった。

(2) 傷痍軍人会会員は、多様な戦争経験や受傷経験を持つ者から構成された。概して、彼らは傷痍軍人としての強い意識を持ち、傷痍軍人会や戦傷病者へ強い関心を持っていたが、障害者としての意識が希薄であった。

(3) 戦傷病者の家族(妻)のほとんどは健常者であった。彼女たちは夫の受傷時期(結婚時期：受傷前と受傷後)や結婚理由によって彼らの障害や戦争について理解も異なり、傷痍軍人会妻の会への参加程度の違いがあった。

現在執筆中の論文や単著において本研究課題に継続して取り組んでいる。

5. 主な発表論文等

[学会発表](計5件)

平成31年3月、"Japan Forum" Workshop (University of London, UK), Disability History in Japan, Tetsuya Fujiwara, "Living with Wounded Husbands: Oral History of Japanese Disabled War Veterans' Wives in Fukui Prefecture."

平成30年9月、第16回日本オーラル・ヒストリー学会(東京家政大学) 藤原哲也「福井県の戦傷病者の家族のオーラル・ヒストリー」。

平成30年3月、Colloquium on Teaching History, (University of Iowa, USA), Tetsuya Fujiwara, "What Forgotten People tell Us."

平成28年4月、経営史学会関西支部例会(大阪学院大学) 藤原哲也「戦争と障害者の家族—傷痍軍人の妻の視点からの戦後史」(大阪学院大学)。

平成27年9月、British Association for Japanese Studies Annual Conference 2015 (University of London, UK), Panel: War Veterans and Disability in Modern Japan, Tetsuya Fujiwara, "The Livelihoods of Japanese Disabled War Veterans in the Post-Pacific War Period."

[その他]

平成30年10月、しょうけい館(戦傷病者史料館)による福井県大野市の戦傷病者の証言映像撮影協力。

平成 27 年 11 月～12 月、福井大学医学部附属図書館企画展示「戦時中の義手 戦闘と障害を
考える」。

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。